

雄 崎 一
曉 林
治 讓
田 田
基 井
次 基
郎 次
敦 郎
島 敦

尾崎一雄・上林 暁
坪田讓治・梶井基次郎
中島 敦

新潮社版

日本文学全集 15

尾崎一雄・上 林 暁
坪田譲治・梶井基次郎
中島 敦

発行／1967年9月15日 十一刷／1969年10月25日
発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71
発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71
電話東京(260)1111(大代) 振替東京808 郵便番号162
印刷所／光邦印刷株式会社 製本所／大日本製本所
本文用紙／本州製紙株式会社
函貼／三菱製紙株式会社 製函／文京紙器株式会社
カバー・扉・見返／特種製紙株式会社
表紙クロス／日本クロス工業株式会社

目次

尾崎 一雄

暢氣眼鏡

七

父祖の地

三三

玄関風呂

三三

虫のいろいろ

三三

痩せた雄鶏

三三

上林 暁

聖ヨハネ病院にて

七三

春の坂

一〇三

諷詠詩人

一二五

坪田 讓治

お化けの世界
風の中の子供

梶井基次郎

檸檬
檸檬

城のある町にて

Kの昇天

冬の日

寛の話

冬の蠅

器楽的幻覚

一七
一五

三三

三三

三五

二七

二六

二五

二七

ある崖上の感情

三〇一

桜の樹の下には

三二五

愛撫

三二九

闇の絵巻

三三三

交尾

三三九

のんきな患者

三七七

中島 敦

山月記

三五九

悟浄出世

三六七

悟浄歎異

三六九

幸福

四〇三

解	年	注	李	弟	名
說	譜	解			人
			陵	子	伝

奥
野
健
男

五〇九	五〇一	四八三	四四七	四一九	四二一
-----	-----	-----	-----	-----	-----

尾
崎
一
雄

暢氣眼鏡
のんきめがね

—

「ちょっとオ」とか「これよ、これ」とか云う芳枝の声を、「うるさいな」と思い思い私ははつきりせぬ夢から抜け切れずにいた。が、直ぐ覚めた。朝だ。芳枝が、薄眼で呆然してゐる私の鼻先に何か光るものを突きつけて、

「これ」

「何だ」見ると金色の妙な恰好したものが、私には何か判断がつかなかった。

「これ、一寸壊れてるし、あると歯が痛いから除っちゃった」

入歯の金冠だなと思うと、私は全く眼が覚めむっくり起き上ろうとしたが、止めた。ちらと芳枝の顔を見

やり、夜具を鼻の辺まで引き上げ、又眼を閉じて了った。私には一寸何も云えなかった。「態を見ろ」と何かに云われていると感じ、「判ったよ」と反撥的に頭の中であたりを見廻すのだった。するといろいろの顔が浮ぶ。「死ね」と泣き乍ら云った母。「元の兄さんに返って下さい」と手紙を寄越した妹——すでに四年も見ない顔だ。一月程前、雑司ヶ谷にゐる芳枝の姉に、自分達のことを事後承諾させに行つた時、「承知不承知なぞとわたくしにはもう——。ただ、あれは一人の妹ですから、先々人並の生活だけはさせてやって頂きとう存じます」と云われた、その姉の教師らしくないやさし気な眼付き——「もういい、もういい」と苦笑いするのを追いかけて「俺も居るぜ」と顔を出したのは友人のSだ。一週間程前、金借りに行つたが度々のことで断われ、私がふくれ面してゐるとSが改まった顔付になり、「君はどうしても僕とこから持つて行くつもりかね」とゆつくり云つた。私は全然居直つた形でSを見返すと、「為方がないんだ」とふてぶてしい声を出した。Sは、蒼い顔で暫く黙っていたが、「じゃあ、為方がない」と云うなり立ち上ると押入を

ガタンと開け、行李の中から和本二三冊取り出して私の前に置いた。

「足りまいが、これをどうにでもして貰おう」

手にすると、国芳あたりの春画本だ。私はそれを膝の前に置き、暫く考え込んだ。やがて割に平気な顔で「有難う」と云った。が云つて了うと、不意に激しい感情に襲われた。図太い張りが消し飛んで了ったのだ。

「僕は、どんなに恥を掻いても、今、為方がないんだ。絶対に今金が無くてはいけないのだ。出来れば泥棒でもする。君に云ったところが判りっこはない、君がそっくり今の僕になつて見ない以上は。だから、腹でどんなに罵倒されていようと僕は関やしない。その覚悟は初めからしているんだが——」云つては、眼前のSを忘れ、自分だけの感情から意気地ない涙を浮べて了った。Sが其の時どう云う顔をしたかは覚えぬ。後で碁を打ち、双方氣持を取り戻して別れたのだが……。

芳枝が、

「これエ、要らないんだけど——どうする？」

「どうするつたつて——」と向き直つたが、此場合怒つた風をする外ないと思われ、

「なぜ君はそんな莫迦なことをするんだ。その齒、そんなにして、当分治せるあてはないじゃないか」怖い顔をして見せた。芳枝は氣押された様子だつたが、まだ私の氣持をうかがう風は捨てず、独言のよう、

「これ自分で売りに行つて、ドラ焼買おう」と云つた。

私は返事をせず、尚もみじめな自分の氣持を小突き廻してゐた。昨日の夕刊に、或時計店の広告ビラが折り込まれていて、金大暴騰、一匁に付純金いくら十八金いくら、今が売り時、とあつた、それを見ての思い付きに違いない。自分の喜ぶことを予定している様子なのが氣にくわなかつた。或はそれはも一つ屈折して、自分の氣持を軽く運ばせようとした芳枝の心遣いかも知れぬ。それなら更に不愉快だと思つた。二十やそこらの子供にいたわられては堪らぬ。やはり持前の單純暢氣さから、金無くてむっとしている自分を喜ばせる氣でやつた事だろう。この方なら氣に喰わぬ乍らも、此の場合負わされる所まだ多少輕くて済む。——然し可哀そうな奴だ、と主我的な氣持に余裕が出て來た。

そう思うと、気持はずっと芳枝の方に流れ、私はまた違った意味で弱り切った。顔付を柔らげて、

「無い方がいいんなら除ちまってもいいけど、あとどうかな。だけでもう片方のやつはこわれてないんだから、また俺の寝てる間に除ちたりしちゃ駄目だぜ、今度は本当に怒るよ、いいか」

「うん」と急に嬉しそうな芳枝の顔を残し、もう少し寝ると夜具を頭からかぶった。

午近く行きつけの質屋へ出かけ、金冠を見せると十八金七分と云うことで、四円いくらかになった。溜っている利息に呉れと云うのを持ち帰って第一に米を買った。嘗て聞いた、貧乏し切って何も彼もなくなり、金歯を入質して米を買ったが、それを喰う段になり弱ったという笑話が苦々しく憶い出された。

二

芳枝と知り合う前のことを簡単に書く。

三年程一緒にいた妻Eと、私に収入のないことから不和になり、加えて郷里の母との間の鬱積した関係が極度に達した時、何も彼もが面倒になって私は不意に

N市へ走った。N市には私の尊敬する芸術家が居るのだ。N市へ行ってその人の顔を見、声を聞いたら切れそうな呼吸も落ち付こう、ただそれだけの望みしかなかった。Eは行く先を知って居たが、郷里では知らず、のち使の者がEの所へ来て判った。母はあきらめ、一つには行き先が先故多少私の気持も考えたらしく、後追うのを止めた。云い忘れたが、私は父が早死した家の長男で、老いた母と三人の弟妹を世話しなければならぬ身の上なのだ。家計のやり方に就て母から不服を云われ、言われて見て自分も悪い点を認めたら、母がそののみ責めたことから私はつむじを曲げた。そして現実に家の経済は破局に近付き、それを捨て置いてのN行だった。

N市に居着いて、気持では郷里のことから可なり離れることが出来た。行く処まで行っただけだ。が、妻に関してはまだ処理し切れなかった。N行に際し、私はKと云う友人に「あとを万事お願いする」と云い置いたのである。それを云う時、卑怯かな、と多少思った。が、止むを得ないのだとも思えた。Kは私にもEにも古い友だが、一時互の居所の距りから行き来間遠

の頃があった。その間に私とEとの間はひどい不和になつていた。Eが以前やつていた商売をまた始めると云い出し、私も賛成して市内の旧居に帰つてからは、Kもよく来て世話を焼いて呉れたが、第一に私とEとの不和に驚き心配して呉れた。粗暴な私は、すでにその頃口で云うことを止め、Eをよく殴つた。或時はEの左鼓膜の破れたのに気づかず、翌朝鏡に向つて、かわいた血に驚いたことがあった。KはEに同情した。それが段々と育つて行き、Eもそれを感じ始めたを知つてから、私は余りEを殴らなくなつた。そして、私とEとの間は冷え切つて了つたのだ。

N行の支度のこととEと氣まづい口をきき合つた時、私は顔は真面目に、冗談らしい調子で、「俺が行つて了えば勝手にしていられるんじゃないか、まアふくれるな。俺は鉾をおさめるぜ」と声だけで笑つた。

「何おっしゃるの」Eは云つたが、私は云う顔付を見ようとしなかつた。Kにはああ云つたし、これで片づこう、そう思つた。

N市の、現実に妻の顔見ぬ生活では、Eに対して巻き切つたと見えた私の氣持にも、予想通り多少のゆる

みが来た。Eを哀れな女と思えた。が、一三カ月して私の動揺も静まつた。八カ月目に帰京し、直ぐ妻との間を決算した。EはKの妻になり、郊外に家を持つた。

三

一人になつて一年後、昨年の夏、K市から始めて東京に出て来た芳枝と知り合い、一カ月のつき合いの後、事実上の結婚をした。

私に母や弟妹を捨てさせ、妻を去らしめたのは直接には金の問題だが、根本は私が小説を好くことにあつた。私としては普通の世渡りの成り難い程元來偉くも莫迦でもないと密かに思つてゐるのだが、いつか小説好くことの深みに陥り、父の遺産が無くなつて氣付いた時は遅かつたのだ。世を渡る術の足場は全て失ひ、余裕あるころその方向への心構えは捨てて顧みなかつた故、あらゆる意味の空手で、追われても走る氣力のない野良犬、先ずそんなものだ。一人になつた時、それでいいと思つた。もとよりなかなか氣に入つたものが書けるとは思わず、書いてもそれで世間並にやつて

行く望のないことは前からの覚悟故、自分一人で困ってあれば済むと気楽だった。再び結婚はすまい、腐れ縁の古女房が居るのだと小説のことを考え、事実N行以来書けそうに思えて来たのであった。

芳枝に好意を持ち、芳枝の肚も判った時、私は当然躊躇した。然し、それを飛び越えて了った。芳枝のすなおに示す感情の美しさに挫かれたのだ。が、一方、また此の女を苛めるのかと自分を咎めぬわけにゆかなかった。その気持は、芳枝が若く、何も知らぬ暢氣な娘と思えた故、強く来た。

四

居る所は汚い下宿の六畳で、机、本箱、空筆筒を並べ、コンロを廊下の隅に置いて自炊生活だ。宿主は、為事が片付けば纏めて払うからとの私の言を信じ切れぬらしく、食事持ってくることを断わったのだ。宿には相当額の宿料が溜っていた。自分は今、何もせずにいるのではないから少しは余裕を見せ、落ち付いて為事をさせて呉れぬものかと、多少腹が立った。いくらでもと入金をせめ立て、食事を止めて其日の米を得る

ためにあちこちと駆け廻らせるのでは、結局為事は遅れて互の損ではないか、そう云ってみても、「うちも困っていますから」と相手にしない。いらだちと奔走とで、事実なかなか為事は捗らなかつた。その為事は或全集物の一部で、遅れる程損であることはよく判っていたのだ。

五

ひどい生活の中で芳枝が割に暢氣でいることは、現在助かると思ひながら私としては一方絶えず追い立てられる気持だった。この暢氣さが何時まで続くか、ゴム糸が延び切ったらそれでおしまいだ。そうならぬうちに、平氣な顔の奥で焦り続けている私のそばで、暢氣な芳枝は暢氣なお饒舌りばかりする。殊に好んで幼時の話をする。今の惨めさに追われて意識せぬながら憶いが暢氣だった昔に返るのかとも思われ、私は氣が沈むのだった。云うことは全でたわいなく、多くの場合相槌ばかりで私は何も聞いてはいないのだが……。

——五つの時、赤い着物を着ていた為、七面鳥に追いかけられた、それ以来その着物を七面鳥のおべと

云った。花を取ろうとして河へ陥ち、通りかかった郵便配達夫に助けられた、その時の着物が河のおべ。新井白石は三つの時、屏風に天下一と上手に書いた、と幾度も母親から聞かされ、張り立ての襖に大きくそう書いて母親を呆れさせた、六ッ。——その翌年父親に死なれた。「……今生きていると七十。あたしの覚えてゐる恰好だつて、おじいさんだった。碁を打つて、赤い毛氈の上で字を書いて、夜はお酒を呑んで、うすいお膝をしていつも坐つてた。おかしいことがあるの」——上、下と、二つの便所があるのに、父親は庭の隅に置かれた桶に小用を足す。四つ位の芳枝が必ずついて行つてそれを覗こうとする。父親は叱つて、やがて帰って行く。いつもいつも桶に浮ぶ泡が不思議だ。「——ええそれ、お父さん肥料にすんのよ。庭の隅にほんのちよっぴり茄子と胡瓜を自分で植えては育てていたの。もう情けなアいのが、数えるほどっか生らないの。そのこやし、自分のおしっこでないといけないんだって、他人のは汚いんだって——」厭なお父さんと芳枝は笑いころげるのだが、私には只何かしゃべって笑う芳枝が可笑しかった。私は芳枝のおしゃべ

りを素通りさせ、勝手に自分だけの思考を追う。次のようなことを憶い返している。——

六

二カ月程前、急な宿料の催促に居たたまれず、この宿を逃げ出したことがあった。金策に出て来ると立ち上る私をつかまえて離さず、一人此処に居るのは厭やと泣き出した。連れて出かけたが、今日いくらでもと云うのがもとより出来るあては無く、夜になった。宿の方向へはすねた馬車馬のように動かぬ芳枝を連れて、或友人の下宿へ行った。

私だけが上ると、三階の汚い四畳半で、若い貧乏な友人が、「やア」と起き上った。今夜泊めて貰いたいと私は云った。

「いいとも。芳枝さんは？」

「玄関にゐる。あいつも頼む」

「ああ。いよいよ夜逃げか」

「そんな形だが、荷物は一つも持ち出してない。そのつもりでなかったんでね」

「明日行つて、知らん顔で一寸したものの持つて来るん

だね。——兎に角下へ行って蒲団借りて来よう」

「じゃア、序でに芳枝に上れて云つて呉れ」

「ああ」と降りて行つたが、暫くして戻つて来ると、妙な顔で、芳枝がいない由云つた。どうしたことか見当がつかず黙っていると、

「捜して来ようか」と友人が多少せき込んで云つた。

あいつ大分興奮していたがと思ひ、私は一寸不安になつた。が同時に何となく腹が立つて来た。

「そうだね——今にやつて来るだろう、他に行く所はなし……」考へていたが、やがて三階の窓際に立つと私は十二時に近い真黒な外に向つて、

「芳兵衛、早く来ないか。来ないと、もう知らないぞ」と怒鳴り、思い切りの大声で「莫迦」と云つた。然し、返事はなかった。前の原を隔てた或大学の野球部合宿の建物が闇の中から「莫迦」と木魂を返して来た。私はひどく腹が立ち、自分の顔の蒼くなるのが判つた。友人が、

「——然し、他に行くところがないんだから尚……」云いかけるのを、

「いいんだ。癖になる、いよいよ来なければそれでオ

しまいさ。兎に角寝ようか」

「寝ようか」友人は芳枝の床もつくつて呉れた。それを見ると今更に困つたと思つた。

三十分程して、階段を上つて来る音を聞き、私には芳枝と判つた。大跨の足音が障子の外で止り、「今晚はア」間のびした声だ。「どうぞ」答え乍ら、友人が起き上つた。腹の底に湧き起つた安堵の気持を押しつぶして、

「どこをウロついていたんだ、莫迦」私が云うと、「ううん。ここ開けてエ」と足で障子をガタガタやっている。友人が開けると、

「今晚はア。ああ重かつた」両手にかかえた風呂敷包みを、ドサリと置いた。

「何だそれは」

「着物に寝衣に枕掛けに毛布に、それから——」と包みを開けにかかつた。

「呆れたね」私は丁度こちらを向いた友人の顔を見た。友人は変に目を光らせ、

「うむ」とうなるような声を上げた。そして、

「君どうだこれは」と私を見た。私は或感じに迫られ

たが、笑って、

「こいつは只暢氣なんだよ。——まあ、いいや、持ってきたものなら、丁度間に合う——」

「持って来ちゃいけないかったの？ だってこんなもの、清水さんとこにないでしょう、余分」

「ああ、持って来てよかったよ、重かったろう」

「重いのは平氣だったけど、もう夜中でしょう、随分怖かったわ、ここへ来る道」

「じゃア君、寝よう。今日は疲れた」私は真先に横になった。芳枝は持ってきたものを、これ清水さん、これあなた、これあたしと分け、直ぐ寢支度にかかった。やがて横になったが、暫くするといびきを立て始めた。

私は黙って天井を見ていたが、疲れながら一寸眠れそうでなかった。やはり上を向いて眼は閉じている清水も同じらしいと思っていると、彼が上向いたまま、

「君は、暢氣だ暢氣だと云うが——」と云った。

「そりゃ、それだけで片付けは居ないよ。然し暢氣で簡單坊主なことは事実さ。只それだけに僕としては尚のこと——何と云うかなア」

「若いんだし。……何とかして君の為事を早く仕上げたいもんだよ。刻下の急務はそれだ」

「そうなんだ。それがねえ、今の僕は——碁や将棋で後手後手と廻っていじめられる、あれだ。何とかして先手さえ取れば——」

「うん」

暫くして清水も寝入った。

二三日経って、清水の隣室が空いた。夜具付きで借りることにし、私達はそこへ移った。

窓の下の広場は三つに仕切られ、野球部の合宿に面した側は全くの空地で学生や子供達の小さな球場になり、某美術学校に面した側は、テニスコートとベビーゴルフ場だった。或時、清水の部屋から二人の学生の球投げを眺めていたことがあったが、学生は清水の知人らしく、我々を見付けると、グロウヴを高く上げて見せた。

「やろうと云うんだが、どうだ。道具はある」清水が腰を浮かすので、出かけることにした。芳枝もついて来た。